要約

大西洋を超えるイタリア系移民／亡命者の実践
—アメリカ合衆国におけるイタリア統一支援運動—

林 孝洋

いわゆるリソルジメント期、生きながらにしてナショナル・アイコンとなったジュゼッペ・ガリバルディのイメージや語りは、祖国から離れた土地に住むイタリア系移民／亡命者に祖国とのつながりを意識させ、イタリア系住民を団結させた。その結果、彼らによって遠隔地で祖国に対する支援が展開したのである。このような背景を踏まえて、本研究はイタリア統一運動という側面を持つリソルジメントを、アメリカ合衆国に住むイタリア系移民／亡命者の主体的な行動から再構築する。

リソルジメント史の文脈において、従来の一国史観を乗り越えるためにトランスナショナル・ヒストリーが注目されている。2007 年にアルベルト・マリオ・バンティとポール・ギンズボルグが、政治史中心のリソルジメント研究からの転換を提言して以来、様々なパースペクティヴからリソルジメント研究が再考され始めた。そして 2014 年にオリバー・ハンスとルーシー・ライアルが、リソルジメント研究のナショナルな理解が今日までイタリア国家統一の歴史に影響を与えていると批判し、トランスナショナル・ヒストリーの有用性を強調したことは記憶に新しい。また、イタリアについて学ぶこと自体が、国民国家の制約を受けている現状で、国民国家の枠組みで研究を行うディシプリンに対する再考が求められており、イタリア史研究、イタリア文学研究、イタリア文化研究といった枠組みを超えたアプローチが模索されている。つまりリソルジメント研究は現在、一国史研究の根底にある「方法論的ナショナリズム」を乗り越えようとする過渡期にあるといえるだろう。したがってアメリカ合衆国を舞台にリソルジメントを語る本研究は、イタリア史の現在の研究動向に資するものである。

リソルジメント期のイタリアは、半島外との関係を持ち続けていた。移動の理由が経済的なものであれ政治的なものであれ、出生地から離れ新しい土地に移動した人々は、その地で新たな人間関係の中に身を置き、日々の糧を得るために労働をしながら新しい社会生活を営むことになる。しかし、生まれた社会に対する関心や情緒的つながりを失うわけではなかった。ナポレオン＝ボナパルトによるイタリア制圧および姉妹共和国の誕生とその崩壊を契機に、カルボナーリアや共和主義者たちによって展開されたアルプスからアドリア海の間での革命、その革命運動に対抗する反動的な再編、サルデーニャ王国とオーストリアとの間で勃発した北イタリア諸地域の帰属をめぐる二度の戦争が生じた結果、政治的混乱と国境線の度重なる変更を余儀なくされたリソルジメント期のイタリア半島は、その被害から逃れるべく多くの移民／亡命者をイタリア半島外へと押し出した。

商機を求めて海を越えた商人や、イタリア半島内での革命の失敗により移住を余儀なくされた政治亡命者が大西洋を越えてアメリカ合衆国に到達したが、彼らは出身地と商業的・政治的・社会的な相互関係を維持していたため、祖国の情勢を注視しており、祖国が窮地に陥ると、遠隔地からでも実施可能な寄付募集および送金活動を実践した。

合衆国におけるリソルジメント支援運動に関する先行研究では、イタリア半島とアメリカ合衆国をつなぐ思想的な共感が注目されてきた。まずヨーロッパで同時代に生じた革命の失敗を機に渡米した亡命者が、合衆国の知識人に 1776 年の価値を再認識させたことで、合衆国内部でヨーロッパの政治情勢に対する関心が高まった。そしてコッシュートやガリバルディのような著名な亡命者の訪米で、ヨーロッパ王政の「専制、圧政」に対する非難と革命家の「自由、共和主義」に対する思想的な共感が合衆国北部で生じたことが指摘されている。

さらにリソルジメントの中でも、とりわけジュゼッペ・ガリバルディによって開始された「千人隊」の遠征に対し、合衆国北部で熱烈な支援活動が展開したことを先行研究は強調している。このガリバルディに対する支援活動は、教皇国家を打倒しローマを手にすることを最終目的とするガリバルディの反教権的性質と、合衆国南部の奴隷制に対する合衆国北部での反感が、「旧体制」の打倒という大きな思想的文脈の中で合致したために生じたと解釈されている。そのため、これまでは北部自由州諸都市に研究が集中しており、それ以外の地域で生じたリソルジメント支援はほとんど注目されてこなかった。

そこで、合衆国北部地域を対象に設定し思想的な共感に注目してきた先行研究に対し、本研究は、現実の空間においてイタリア統一支援運動を実践したイタリア系移民／亡命者の主体性から、北部自由州諸都市以外の地域も含めたアメリカ合衆国でのリソルジメント支援運動を考究する試みである。そのため、19 世紀中葉のニューヨーク、サンフランシスコ、ニューオーリンズの三都市を対象に、それぞれの都市でリソルジメント支援やガリバルディ支援を担ったイタリア系移民／亡命者の活動に注目しながら論を進める。そして各都市の歴史的背景、移民／亡命者の移動の経緯と職業、合衆国の歴史とイタリア半島の歴史の交錯を念頭に置き、移民／亡命者の日常的実践や社会・経済生活、そして祖国に対する寄付募集活動の分析を通じて、イタリア統一運動をトランスナショナルな視点から再評価する。

まず第一章では、ニューヨークに渡った亡命者を思想と現実の媒介者として捉え、彼らの実施した寄付募集活動を分析する。ニューヨークという都市は、幾度となくヨーロッパからの亡命者を受け入れた経験から、亡命者を英雄として歓迎する伝統を有していたため、祖国の解放を渇望する多くの亡命者が活動している空間でもあった。そのような土地に訪れた亡命者ジュゼッペ・アヴェッツァーナは、ガリバルディの遠征に対する支援の素地をニューヨークに見たのであった。そしてガリバルディに対する寄付募集活動が、アヴェッツァーナが代表を務める「イタリア協会」の日常的実践、

奴隷制をめぐる自由州の議論とガリバルディの遠征を関連付ける日々の報道、そしてガリバルディ自身が持つ英雄としての文化的イメージの混淆によってニューヨーク市民、イタリア系住民、他民族の亡命者をも巻き込んだ動きへと昇華していったことを示す。

第二章では、先行研究の地理的な制約を越えて、西部主要都市のサンフランシスコへと目を向ける。政治亡命者の「神話的側面」を解体しながら、ゴールドラッシュを契機に、それまで居住していた南アメリカ大陸から流入してきたイタリア系商人とサルデーニャ王国から死刑判決を受けてサンフランシスコに流れ着いた亡命者が構築した空間に注目する。現実の空間に着目することでイデオロギーのみで移民／亡命者をラベリングしてきた先行研究を修正し、サンフランシスコでのイタリア統一支援運動の再構築をめざす。そして、亡命者や思想家に対象を限定してきた先行研究に対し、遠隔地でのリソルジメントを担った新たな主体として商人の活動を分析することで、サンフランシスコのイタリア統一支援運動が、亡命者と移民が織りなす空間で実践されたことを提示する。

第三章では、これまでの北部中心的な語りを相対化するために、合衆国奴隷州の主要都市ニューオーリンズで実践されたガリバルディ支援運動を、支援活動を担った人々のライフストーリーから分析する。イタリア半島、南米大陸、そしてニューオーリンズを商業圏として生活していたイタリア系商人が、本国に対する支援運動を展開したことを示したうえで、彼らのアイデンティティの二重性にも着目したい。彼らは、イタリア系移民として本国イタリアの統一運動を支援しながら、ニューオーリンズの市民としては、自身の経済利益を維持するため、明確に南部の自由主義に共感していたのだ。

以上の研究から、リソルジメントを現在のイタリア共和国の範囲内で完結する歴史として認識するのではなく、アメリカ合衆国をリソルジメントの「最も遠い銃後」として評価する。そしてその銃後での動きは、イタリア系移民／亡命者の生活様式や商業形態、そして都市の経済的・社会的背景に左右され、それぞれの都市空間ごとに異なるあらわれ方をした。南北戦争やゴールドラッシュのような合衆国史のテーマがリソルジメント史とも接合可能であり、先行研究で分析対象となった合衆国北部地域でのガリバルディ支援が、あくまでも一例に過ぎないことも、本研究に続く研究の重要な視座となろう。